

ドラえもんの原作（マンガ）とアニメの考察から、2つの違いを見る

佛教大学 教育学部 3 回生 下津聖平

序論

ドラえもんや藤子作品に限った話ではないが、有名な作品だと、原作（マンガ）とアニメ両方がある。みなさんはどちらが好きだろうか？答えは人それぞれだと思う。ちなみに、私はアニメの方が好きだ。理由は、アニメだと音声を聞くだけで内容が入ってくるからだ。では、同じ話を見る時に、アニメも原作（マンガ）も両方見る人はどれくらいいるだろうか？私の偏見かもしれないが、ほとんどの人はどちらかだけ見ておけば大体内容が同じだからという思考になるのではないだろうか？ドラえもんの場合は、原作（マンガ）とアニメで大きく違う場合があるから、両方見るべきだと思う。では、ドラえもんの原作（マンガ）とアニメの違いを見る前に、藤子作品以外のアニメをいくつか例に上げてみようと思う。（注：マンガのことを以下「原作」といいます）

ドラえもん以外の事情

多くのアニメは原作がヒットしたことによって、アニメ化されるといった流れだろう。その際に、基本的には、原作の内容をそのまま放送しているとみられる。あるいは、放送時間の関係で話の一部をカットして放送しているだろう。作品が多くて何をあげればいいのか分からないので、私が好きな「ゴールデンカムイ」もこのパターンだと言っておこう。この作品は、北海道にある金塊を見つけるために、冒険するという話だ。原作と違う形で、アニメ化したという物もあると考えられる。Google で、『原作と違うアニメ』と検索すればその例がいくつも出でくる。「とある科学の超電磁砲」というのがその例らしい。アニメで放送されるにあたって、原作になかった設定が加わったらしい。原作と違った内容のアニメを放送する時に問題になるのが、原作の作者とのトラブルだと考えられる。作者自身が自分の描いた物と全然違った内容が放送されて、本来の意味と捉え間違った解釈がされてしまったとトラブルになったことがあると思われる。これはドラえもんにおいてもあったことだ。昔、ドラえもんは日テレで放送されていて（大山のぶ代がドラえもんの声優の通称「のぶドラ」が放送される前の出来事）、この内容や作画があまりに原作と違ったので、藤子・F・不二雄先生自身も日テレのドラえもんは嫌だと言ったそうだ。原作をアニメ化するにあたって、原作の作者とテレビ局との間でトラブルが起きたら厄介なことになるというエピソードだ。ここまで原作の後にアニメ化されるという話をしてきたが、逆の場合もある。アニメの後に原作が出るということだ。「プリキュア」がその例だ。他にも、原作がなくて、アニメオンリーという作品もある。「ラブライブ」がその例だ。

ドラえもんの事情

本題のドラえもんについて考えてみよう。まず、ドラえもんは前の章で述べたどのパターンだろうか？さきほど少し、日テレのドラえもんが藤子先生とトラブルになったという話をしたところからも、「原作と違うアニメ」と考えるのが妥当だろう。しかし、今のドラえもんは（水田わさびがドラえもんの声優の通称「わさドラ」）、藤子先生が亡くなった後に放送されている物であり、藤子先生とトラブルになったことがない。これは言う間もなく当然なことだ。なので、「原作と違うアニメ」と考えるのも違うように感じる。後々詳しく述

べるが、ドラえもんの原作は、小学生1年生～6年生と学年別に作品が書かれていて、話の長さや内容が全然違う。小学生1年生向けの内容の話だと見開き1ページで終わる物もあり、アニメ化する時に放送時間が短すぎて放送できない。なので、「放送時間の関係で話の一部をカットして放送している」の逆で、「放送時間の関係で一部をつかえ加えて放送している」と考えることもできる。この章の結論を述べるとドラえもんは、「原作と違うアニメ」か「放送時間の関係で一部をつかえ加えて放送している」どちらかということだ。これがどちらかという問題については、これからの章を追って考えていこうと思う。

ドラえもんの原作

ドラえもんの原作は、藤子・F・不二雄先生が書いたものである。そして、アニメとの違いを述べる上で重要なことになると思うので予め述べておくが、1970年代～1980年代に書かれている。これはすなわち、この時代の社会的流れという常識を元に書かれているということだ。なので、今（2022年の人）が読んだらどうしてもなんでこんな話を書いたのだろうかとか、解釈するのが難しいという話がある。「不幸の手紙」がその例であり、のび太の家に何者かが「この手紙を誰かに渡さない不幸になるぞ」といったような内容の手紙を送った。これを読んだ当時私は、なんでこんなわけの分からない意味不明な遊びをしているんだと思った。しかし、この話書かれた1977年頃の社会がどのような物か垣間見るとこの話のような遊びが流行っていたということが分かった。

そして、前の章で述べた通り小学生1年生～6年生と学年別に作品が書かれていて、学年によって内容や話の長さや内容が全然違う。例えば、「ドンブラクリーム」と「ドンブラ粉」という話がある（それぞれの話に登場するひみつ道具も話のタイトルと同じである）。この2話は内容もほとんど同じで違う点をあげるとすれば、前者は小学2年生、後者は小学4年生向けに連載されていた。恐らくだが、小学2年生に「粉」と言った表現を使うと分かりにくいので、「クリーム」という表現を作者は選択したのだろうと考えられる。ちなみに、「粉」という漢字をいつ習うか調べてみたが、今は小学5年生で習うらしい。（この話が連載された当時は小学4年生だったらしい）。この点から作者は小学6年間でそれぞれのレベルに応じた作品を読んでもほしいと考えたのではないだろうか。それゆえ、ドラえもんのひみつ道具には似たような道具がたくさん生まれてしまうと考えられる。ここでみなさんに質問だが、みなさんはどちらの道具の方がよりなじみ深いだろうか？恐らく、「ドンブラ粉」と答えるだろう。これは、映画「のび太の宇宙小戦争」、「のび太と銀河超特急」などにも登場した。そして、付け加えておくと、「ドンブラクリーム」の方はてんとう虫コミックに掲載されていない。一つ補足しておくが、一般的なマンガはコミックスとして出す時に連載された順に掲載されるのだが、ドラえもんの場合は、藤子・F・不二雄先生がどの話を掲載したいかを先生自身が選んでこだわりぬいているのだ。なので、「ドンブラクリーム」の方は、藤子・F・不二雄先生自身気に入っていなかったのだと考察できる。藤子・F・不二雄先生が亡くなった後のドラえもん（アニメオリジナルの話、原作にない映画）は、てんとう虫コミックなどから藤子・F・不二雄先生の考えていたことは何かを考えながら作品を作っていると考えられる。

もう一つ、似たような話で2つの学年で描かれていた例を思いついたので紹介しようと思う。「たくはいキャップ」と「することレンズ」があり、前者は小学2年生で、後者は小学3年生向けに連載されていた。この2つの流れをおおまかに説明すると、泥棒をしようとするおじさんを見つけたドラえもんとおじさんは、ドラえもんのひみつ道具を使うことによっておじさんが物を盗まないようにしようとするという話である。しかし1つだけ大きく違う点がある。「たくはいキャップ」（小学2年生向け）の方ではおじさんがなぜ泥棒をしたか書いていなかったが、「することレンズ」（小学3年生向け）の方ではおじさんがなぜ泥棒をしたのか明確な理由が書かれていた。「することレンズ」で、おじさんが泥棒しようとした理由を簡単に言うと、会社をク

びになって病気にかかった妻を助けるためにやむを得ずしようとしたと語っていた。この点から人を助けるために悪いことをするのは果たしてどうなのだろうか？と藤子・F・不二雄先生は当時この話を読んだ小学3年生に投げかけたかったのではないかと考察できる。まとめると、藤子・F・不二雄先生は学年別に同じような話を連載するにしても学年に見合った課題を与えてそれを読み取って考えてほしいと思ったのではないだろうか。

ドラえもののアニメ「アニメオリジナル（原作にない話）」

ドラえもののアニメとは、藤子・F・不二雄先生が書いた原作を元にアニメとして放送している物である。最初にドラえもののアニメの種類がいくつかあるので述べておこうと思う。「日テレドラえもん」、「大山のぶ代ドラえもん」「水田わさびドラえもん」の3つがある。順番に解説しようと思う。「日テレドラえもん」は、1973年4月1日から同年9月30日まで日本テレビ系列にて放送されたドラえもんであり、ドラえもんの声優は、富田 耕生さん（天才バカボンのパパ役）である。「大山のぶ代ドラえもん」は、1979年から2005年まで、26年間放送されたドラえもんであり、ドラえもんの声優は、大山のぶ代さんである。（略して「のぶドラ」とも言う）。「水田わさびドラえもん」は、2005年～今（2022年）も続いているドラえもんであり、ドラえもんの声優は、水田わさびさんである。（略して「わさドラ」とも言う）。そして、この3つのドラえもんの中から今回例に上げるのは、原則「水田わさびドラえもん」とする。（注：「水田わさびドラえもん」のことを以下、「わさドラ」と言います。）

述べるのが遅くなったが、アニメで放送される話は大きく3つのパターンに分けられると考えられる。「アニメオリジナル（原作にない話）」、「原作にある話をアニメ化したパターン」、「原作にあるが放送されていないパターン」。この章では、「アニメオリジナル（原作にない話）」について考えていこうと思う。

それでは、ここからわさドラオリジナルの話について考えていこう。まず、前の章でも述べた、時代背景を描いた話があるか、対象年齢はいつかという点について考えていこうと思う。「スグピクトグラム」という話が2021年7月21日に放送された。この話は、のび太が外国人と話すのに困った様子をしていて、これは、2021年7月23日～同年8月8日に開催された東京オリンピック2020にあわせて放送された話だと考えられる。オリンピックとなれば外国からたくさんの方が来て英語を喋れない小学生の役をのび太にたくしたのではないかと考えられる。また、「剛田、いつ？」という話が2021年3月27日に放送された。この話には、「なんでもデリバリーバックバック」という道具が登場して、リュックサックを背負い自転車をこいで配達をして報酬をもらうというような道具である。これはUber Eatsを彷彿とさせるようなものだとしか言えない。ウーバーイーツの需要はどんどん上がってきている。この話からも、わさドラオリジナルの話では時代の背景を元にした話があると言えよう。対象年齢はいつだろうか？『ドラえもん対象年齢』とGoogleで検索したところ、0～2歳、6～8歳、小学1年生以降、など様々な意見が出ていた。わさドラを放送しているテレビ朝日はドラえもんの対象年齢が何歳だということは述べていない。すなわち、公式としては、全年齢を対象としていて何歳の人向けにといったような放送はしていない考察できる。個人的には小学3、4年生あたりまでが一般的な人々の対象年齢だと思う。小学校低学年（1、2年）の頃まではドラえもんの話をしたら多くの人が反応してくれた覚えがあるが、小学3年生頃からドラえもんを見る人が減って、むしろ、ドラえもんを見ている方が珍しくて変わっているというような扱いを受けた。このような経験をした人は私の友達にもいた。しかし、「灘校ドラえもん同好会」や「東大寺学園ドラえもん同好会」、「京都大学藤子不二雄同好会」や「早稲田大学ドラえもん研究会」と言ったように高校・大学でもドラえもんをテーマとしたサークルがあるという事実からすると高校生・大学生も対象になるのかもしれない。いや、全年齢が対象ということで間違いがないのだろう。



図1: ミニシアター

ドラえもんの原作とアニメの違い

「原作にある話をアニメ化したパターン」、「原作にあるが放送されていないパターン」について考察しようと思う。まず、「原作にあるが放送されていないパターン」について考えようと思う。これにはいくつかパターンがあると考えられる。「短い」、「音がない」、「酷い表現（シーン）がある」というパターンがあるのではないだろうか。「短い」についてだが、ドラえもんは原作では学年別に連載されていると何度も言ってきたが、小学生向けのものだけでなく幼稚園児向けに書かれた話もある。例えば、「しょうぼうしゃ」という話はその例であって、この話は幼稚園児向けに書かれた作品であり、コマ数はなんと4コマなのだ！！！！もはや、新聞に掲載されている4コマ漫画と考えた方が納得いくかもしれない短さなのだ。しかし、こんな短い話もなんとか放送しようとしている動きもあるように見える。わさドラ初期の2005年～2007年頃まで「ミニシアター」という物があり、これは原作にある短い話を放送しようというような物だと考えられる。

また、事例としては少ないが原作で短すぎる話を無理やりアニメ化した物もある。「サクラいっぱい大作戦」（2021年放送）がその例である。この話の元になった原作の話は、小学1年生向けに掲載された「はなさくはい」であり、この話は見開き1ページで完結してしまう短い話だ。見開き1ページでは話の長さが明らかに足りないのので、ドラえもん、のび太、スネ夫、ジャイアン、しずかちゃんの5人で街中に桜を咲かせるという原作にはなかった要素があった。

次に、「音がない」についてだ。これは、「音のない世界」という話が該当する。この話はもしもボックスで音を必要としない世界を作る話だが、音によってストーリーを伝えるアニメでこれを放送すると無音にならざるを得ないのでできないと考えられる。

「酷い表現（シーン）がある」についてだ。「分解ドライバー」がその例だ。この話では分解ドライバーというなんでも簡単に分解できる道具が登場するのだが、のび太やジャイアンの体もバラバラになる描写がある。これをアニメで放送すると体が分解していてグロテスクな感じになるのではないだろうか。

最後に、「原作にある話をアニメ化したパターン」について考えよう。これにもいくつかパターンがあると考えられる。「時代の流れにあわないゆえの改変」、「放送時間の都合で改変」、「旬の話題を盛り込んだ改変」というパターンがあるのではないだろうか。

まず、「時代の流れにあわないゆえの改変」についてだ。一番有名なのは、原作ではのび太のパパを初めとした人がタバコを吸っているがアニメではこのシーンをあまり見ないことではないだろうか。原作は1970年代

～1980年代の時代背景を元に書かれたということは述べた通りだ。この時代はタバコを吸うことは当たり前だと考えられるが、わさドラが放送された2000年代に入るとタバコを吸う人の方が少なくなって、2018年には健康増進法が改正されていっそうタバコを吸う人を差別するような社会になってきている。それゆえ、誰かがタバコを吸っているシーンがあれば別の誰かが別の物を使い表現しなければならない。例えば、「ジャイアンの歌がやめられない」（2015年放送）がその例である。原作ではのび太のパパがタバコがやめられないと書かれていたが、わさドラで放送された時はのび太のママがせんべいを食べるのがやめられない感じで放送されていた。他には、原作で「薬」や「錠剤」と言ったような表現を別の形で表現している物もある。これもこのような表現を使うのが時代の流れとしてよくないと考えられたのだろう。「世の中うそだらけ」がその例である。原作では、「ギシンアンキ」と「スナオン」というビンの中に入った薬（錠剤）のような道具が登場した。この話が2006年にアニメで放送された時には、「ギシンアンキ」は「ギシンアンコ」、「スナオン」は「なんでも信じるコ・缶入り」という、「薬」っぽいものから「アンコ」っぽい物に変わっていた。例をあげるとキリがないが、この他にもいくつが例があるだろう。

次に、「放送時間の都合で改変」だ。「原作にある話をアニメ化したパターン」でこのパターンが一番多いと考えられる。何度も述べてきたが、ドラえもんは学年別に連載されてきたゆえに、小学生低学年向けの話を放送しようと放送時間が足りずネタを付けたさなければならないようになるからだ。先ほど、「サクラいっぱい大作戦」（2021年放送）の原作は、「はなさくはい」という見開き1ページの話だと述べたがこれもここに当てはまるだろう。この他にもたくさん例があるのでぜひともみなさんで見つけてほしいと思う。

「旬の話題を盛り込んだ改変」について考えて終わりにしよう。これは、「アニメオリジナル（原作にない話）」を考える上で時代背景を踏まえているかと思いたと思うがこれと意味としては同じ意味である。「原作にある話をアニメ化したパターン」にこれをもちこんだ物がないか探すということだ。例をあげると、原作では「夜空がギンギラギン」という話があったが、アニメで放送された時は「すい星がギンギラギン」（2013年1月8日放送）になっていた。この話はどちらも内容としては大きく変わらない。大きく違うのは、「すい星がギンギラギン」（2013年11月8日放送）の方は、のび太たちは星空を見るだけでなく、すい星も見たいと言い出したのだ。これは、この話が放送された11月頃に日本にすい星が近づいていてよく見えるという状況だった。このネタをドラえもんの世界にももちこんだのだろうと考えられる。

最後に

これまで、ドラえもんの原作とアニメについて述べてこの2つの違いについても述べてきたつもりだ。「原作にある話をアニメ化したパターン」で、「放送時間の都合で改変」の例であれば数えきれないほどあるので原作とアニメを見比べてみるのはいかがだろうか。私もほとんど「わさドラ」しか見たことがなく、「のぶドラ」や「日テレドラえもん」は知らないのもまだまだだろう。原作もアニメも知り尽くせるところまでとことん知りたいものだ。